
冒険者かく語りき3 カボチャ精霊と花火大会（短編ver）

玉藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者かく語りき3 カボチャ精霊と花火大会（短編ver）

【Nコード】

N3676Y

【作者名】

玉藻

【あらすじ】

今日もマイペースに進む角ありノーム娘二人パーティ。
三番目のダンジョンに突入した二人の明日はどっちだ！
原作としているウィザードリオンラインをプレイしていなくても楽しめる様に出来る限り固有名詞は語らず、描写も心がけております。

他の2作品に比べると笑いの要素がかなり増えております。

11月7日、某所で行われた花火大会の模様の実録が物語の後半に入れています。セリフはほぼ参加者の皆様の言っていた事であります。作者の妄想ではありません。乱心していません。参加してくれた方々ありがとうございました。

好評の為連載形式にしてまとめました↓<http://ncode.syosetu.com/n4182y/>
今後はこちらで連載していく予定です。今まで書いた分は内容は同一となっております。

（前書き）

何だかんだで読んで頂ける方が多くて嬉しい悲鳴です。本当にありがとうございます。

「何か…外が騒がしいな…」

眠い目をこすりながらミューは簡易寝台から起き上がる。

昨夜は遅くまで遺跡に潜り、食虫植物を退治したり、幽霊の依頼の為に墓を探したりしていたのだ。

長い時間走り回ったり奥まで行ったりしていたので普段以上に疲れてしまい、昼近くまで寝てしまっていたのだった。

「おはようございます」

「もう昼近いよミューちゃん」

「ふあゝああああ。そうですねー」

2階から下り、顔馴染みとなった女将を振り返りもせずに挨拶する。

昔は冒険に出てもまともにお金を稼ぐ事が出来ず、好意で無料にして頂いた馬小屋に泊めてもらっていたのだったが、寝心地は決して良いものではなく体調も万全にはならない為、そこそこに稼げる様に成長してきてからは部屋をグレードアップしたのであった。ゆくゆくは天下のロイヤルスイートの部屋に泊まるのだ…というのがミューの密かな夢である。ちなみにロイヤルスイートの部屋に泊まる金額があれば鎧が一領余裕で買ってしまうのだから、その贅沢さは推して知るべしというものである。

「あ、そーだー女将さん。外が何か騒がしかったけ…ど…わあああああ魔物!!」

街中であるにも関わらず思わず背中に背負った愛槍を抜き放ち構え

る。

本来宿屋の愛想のよい女将がいるべき場所には、人の大きさを超える鎌を持った死霊の姿があったからだ。

冒険者が人に危害を加えては犯罪である。冒険者でなくとも勿論ではあるが。街中で自分に魔法をかける為に触媒の魔法の杖や、短剣を抜き放つ者もいるが、抜刀音が聞こえるとやはり身体は構えてしまふ。これを無意識に聞き流す様になるのも、ある種の熟練の証でもある。

気合いの一撃を放とうと、後ろ足に力を込めかけた所でミューを止める声が聞こえた。

「ミューさんダメー！それは女将さんだよー！犯罪者になるよー！」

「へっ…？」

聞き慣れたりリアの声に思わず力を抜くと、全く表情の変化は分らないが安堵したのか宿屋の受付にいる魔物は鎌をゆっくりと下ろすと聞き慣れた女将の声で危なかったと漏らしたのだった。

土下座せんばかりに謝るミューを笑って許してくれた魔物もとい女将さん。どうやらこういったやり取りも毎年恒例らしい。非常に人騒がせである。

― 毎年恒例ハロウィン祭 ―

街全体がカボチャや魔物に扮した仮装をする。

食事を奢ってくれるというリリアに連れられ酒場に向かいながら説明される。ちなみにリリアも今年初めての祭であるが早起きしたから知っているというだけである。

カボチャ頭の精霊がこの時期に各地に種を蒔く…というのが本来の祭らしいのだが、今年は何故か精霊が種を下界に落としてしまったらしく冒険者にそれを依頼しているそうだ。ちなみにギルドは一切関与していないとの事。

衛兵まで骸骨の魔物に仮装しており、おっかなびつくりしながらミュー達は酒場へ到着する。

「定食大盛りとケーキのダブルお待ちどうさまです！」

「さあさあミューさん、今日は私の奢りですからジャンジャン食べて下さいね」

「ちよつと…！リリア頼み過ぎでしょ！どこにそんなお金あったのよ！大丈夫なの！？」

「ふふー。偵察に行った大蔵で宝箱いっぱい見付けたり、他のパーティと一緒に魔物倒してウハウハなんですよ」

よく見れば、装備している鎧や盾も一通りグレードが上がっている。数日別行動している間に随分と稼いだ様子だ。先日『人狩り』に襲われてかなり気落ちしている様子でほつといて下さいとまで言われたのだったが、まさか修行をしているとは…ミューは元気になっているリリアに安心しつつも、自分と差がついてしまった事に少しやきもきする胸を抑えながら定食に手を伸ばした。

ここの酒場のドワーフの店主が作る豪快且つ繊細な料理は、冒険者達にも人気である。先日瓦版に紹介された事もあり、今日はいつも増して混んでいる。

ダンジョンに潜る際に、やはり空腹では話にならない。しっかりと食べ、身体に力をつけて潜るのだ。事前んにしっかりと用意をするのも良い冒険者の務めである。

余談だが、生水ばかりで宿屋にも泊まらずに何日もダンジョンに籠る冒険者もいるが、やはり体調を崩して本来の力が出なかったり、ふらついた所を突かれ普段よりも大きな怪我をしてしまったりしてしまう。身体が資本である為、管理は大事である。

腹も膨れた二人は街中でも少し高台になっている酒場を出て、噴水広場へ下りていく。

「確かに…なんかカボチャ祭って感じね…」

噴水の前にカボチャを被った小さな姿が見える。これが件の妖精の様だ。何故か冒険者が妖精からカボチャの様な物を受け取っているのが見える。二人して近付くとカボチャ妖精はこちらに気付いて声をかけてきた。

「やあ！お姉ちゃん達！イカス帽子が欲しくないかい！」

「わーい！」

「ああ…はい頂きます…」

嬉しそうにカボチャで出来た帽子を受け取るリリアと、何か言いたげなミュー。

どういった構造になっているのか、カボチャの下半分を切り抜いた形の帽子は兜の上から被っても落ちる事はなく、また重さをまるで感じなかった。髪の毛の間から突き出している角を阻害する事もなく中々快適である。

「イカスだろう！僕が被っているのに近いデザインなんだぜ！横のおばあちゃんから飴をもらってね！お姉ちゃん達！」

やたらと元気の良いカボチャ妖精のすぐ横に、椅子に座りとんがり帽子を被った老婆がこちらを見ると、箆った様な笑い声をあげながら飴を差し出してきた。

「わーい」

「ああ…どうもです…」

「種を持ってきたらもつと良いものをあげるからね…」

そういつて独特の笑い声をあげる老婆。

何やら一抹の不安が抜けないミューは気分が上がってこない。

「ミューさんさつきからテンション低いですよ！」

「リリアが高過ぎるのよ…。無料で人から物を貰うのって…何か慣れなくて」

「お祭りだからいいんですよ！」

「うん…そっか、そうだね」

早速ウキウキしながら貰った飴を舐めるリリア。

「わあっ甘ーい！ミューさんこれ美味しいですよ！」

「ついさつき四人分の料理を二人で食べたのによく食べれるわね！。私は取っておくわ」

「甘い物は別腹ですよ！うーん昇天しそうな甘さ…」

「全くもっ…ってリリア？」

飴を舐めていたリリアがそのまま前のめりで地面に倒れ込む。

「へっ？リリア…？リリアっ！！」

リリアは息をしていなかった。

暫くして復活して寺院から戻ってきたリリア。

「いやあゝ酷い目に合いました」

「ビックリしたわよー！全く…」

「あ！でも寺院の前で面白い話を聞きましたよー」

魂となつて彷徨つていた時に、寺院の前にいた人（魂？）に何やら話を聞いてきたらしい。それによると、種は一部の魔物…基本的に各ダンジョンの奥に棲息する魔物や、魔物が隠し持った宝箱から入手が可能だという。

「というわけで今日は大蔵行きましょう！」

「えー大丈夫かな…かなり魔物が強いっていうけど…」

「だ・か・ら、私が偵察してきてるから大丈夫ですー」

酷い目にあつたばかりなのに、いつになく元気なリリアに引きずられる様にして、ミュー達は大蔵へ向かったのだった。

―大蔵室―

元々はとある商人の宝物庫になる予定だったのが、工事計画が中止している間に盗賊やはぐれ冒険者等のねぐらになってしまったという哀しい場所である。

「要するに泥棒ばかりなんでしょー。嫌ね」

「まあ近寄らなければ大丈夫じゃないですか？あ！泥棒といえば、最近『ぱんつ泥棒』が出るらしいですよ」

「ええっ…何よそれ！！」

露骨に嫌そうな顔をするミユー。

リリアが話してくれた所によると、女性の冒険者に襲い掛かり、下穿きを脱がせ奪い去り、後日洗濯した上に強化までして送り返してくる…という謎の行動を行う泥棒だという。

「つまり…変態紳士なわけね…」

「洗濯して強化までしてくれるならいいかもです」

「いやいやリリア、あんたさあ…、下何も穿かないで帰るの？」

「あ……。恐ろしい犯行ですね…」

恐怖の面持ちで唾を飲み込む二人。

「とにかく…注意して進みましょう」

「ですす」

遺跡のダンジョンと違い、下水と同様に非常に見通しが悪い。通路も狭い場所が多く、明かりも人骨から火が上がっていたりと侵入者を脅かす仕掛けが多い。

通路から部屋に入る時にも床から炎が吹き上がる箇所もあり、歩くだけで集中力を使う場所をリリアの先導で探索を進めて行く。

途中冒険者の為の募金を奨められたり、何故か酒をせびられたりしながら奥へと歩みを進めていった。癒しの魔法の結界を買い忘れたリリアが一度街へ戻った以外は比較的順調であった。

「やっぱり遺跡とは比べものにならないわね…」

「かなり魔物が強くなってますよね」

下水や遺跡と比べても場所柄が非常に強い甲虫に、こちらを麻痺させる程の一撃を放ってくる大柄な戦士、徒党を組んで攻撃してくる野盗までおり非常に辛い探索となっていた。

「なんか…ごめんね」

「ミューさんいきなりどうしたんですか？」

常に勝ち気な彼女らしくなく、しおらしいミューの言葉に、癒しの魔法の結界を用意しながらリリアが問い返す。

「私…傷を負ってばかりでリリアにずっと回復の魔法使わせて疲れさせてるし…今日ずっと先導してもらってるし…なんか…私仕事してないなあって…」

肩を落として下を向いてしまったミューに、リリアは優しい顔で声をかける。

「ミューさんはちゃんと仕事してますよ。私がおとりになって連れてきた魔物もしっかり倒してくれるし、いざという時には私の前に出て守ってくれるじゃないですか。回復するのが聖職者の務めです。気にしないで下さい」

そういつて笑いかけるリリアの顔はまさに聖母のようで、ミューの沈んで冷えていた心は温かく溶かされる。

「うん…ありがと。私頑張る。次の広間しっかりやるね」

「私もあんまり来た事のない奥まで来たし、もう少ししたら帰りましょ？」

「うん！そうだね」

しかし、この後少しがいけなかった…。

「ミューさん魔法使いを先に！」

「わかってる…！」

大広間で魔法使いと、盗賊の中でも戦闘に特化したファイタータイプの集団に囲まれてしまったのだ。

ファイターを攻撃しようとなると、脇から火の魔法が飛んでくる。

魔法使いを追おうとすると、ファイターが斧を振りかざし道を塞ぐ。見事な連携で次第に回復も間に合わなくなる二人。

「仕方がない…。リリア！完全に守りを捨てるわ！少しの間堪えて！」

そう言い放ち、大地に足をしっかりと踏み締めると槍を激しく振り回し、辺り一面に砂埃を撒き散らしつつ数体のファイターを巻き込む。さらに、怯んだファイターの横を走り抜け魔法使いに肉薄すると一気に槍で貫く。堪らず地面に倒れ伏す魔法使い。しかし先程からの攻撃の影響で耐久が限界を超えたのか槍にひびが入る。

「リリア！大丈夫！？」

言いながら槍を背中に背負い、予備で持ってきていた盾と短剣をポーチから出すと、ファイター達に走り込みながら足を狙って攻撃する。足を抑え動きが鈍るファイター数名。

リリアとファイター達の間に入り込むと盾で斧の攻撃を防ぎながら、確実に一人ずつ打ち倒して行く。

ようやく周りに動くものがいなくなった後も、暫し肩で息をするミュー。

「リリア大丈夫だった？」

振り返ったミューが見たのは、青い顔をして息も絶え絶えになって地面に倒れているリリアの姿だった。

「リリアっ！どうしたの？！回復間に合わなかったの？！」

辛そうな顔で弱々しく首を振るリリア。横を見ると開いている宝箱がある。どうやら戦闘中の喧騒で開いてしまったらしく、毒々しいガスが上がっている。

「毒の罠…。急いで毒消しを！」

しかし、ポーチの中には回復薬と、街でもらった飴位しか入っていない。いつの間にかアイテムも底をつきかけていた様だ。乱戦状態では確認する暇もなく、隙を見ながら回復薬を使い続けたいた為だろうか。

「ああ…どうしよう…」

「ミューさん…ごめんね…足引つ張っちゃった…」

「そんな事ないっ！そんな事ないよお…私かもっと頑張れてたら…」

「ミューさんは充分頑張ってますよ…。私を置いて街へ帰って下さい…。また魔物の集団が来たら二人共…」

「そんな事出来るわけないでしょ…！」

「最期に…飴…舐めたいな…」
「……………分かったわ……………」

リリアのポーチを探ると何故か飴が沢山出て来た。どうやら一度街に帰った際にまた貰った様だ。適当に一本選ぶと、リリアの口に入る。

「ああ…美味しい……………」
「リリア……………」

涙を流すミューの前で何故かみるみる顔色が良くなるリリア。

「あれーなんか元気になってきたー」
「嘘……………!!」

思わず絶叫するミュー。へへへと頭をかきながら立ち上がるリリアのポーチから、ポロポロと飴が落ちる。状況がよく飲み込めないままミューが落ちた飴を拾い集める。よく見ると飴の棒の部分に紙が細く巻いてあるのが分かった。開いて見てみると…

【身体の状態を治してくれる飴です】

「ばあああああああああ」

ミューが再び絶叫した。

帰り道…。また少しプリプリと怒るミューをリリアが宥める。

「あんな小さい紙じゃ分かんないですよー」

「そうだけど、冒険者足るものもつと注意力を持ってさーってもういいよ。とにかくリリアが無事だったし」

「ミューさん…」

「ほら、いいからこの扉開くの大変なんだから手伝ってよ」

「はい」

縦横に大人の身長の二倍程もあるつかという巨大な扉を力を籠めて開け…開かない。

「ちょっとリリア…それ私と逆に閉める方に力入れてるでしょ…」

「え…嘘？ミューさんが逆なんじゃないですか？」

何度か試すも一向に扉は開かない…。そうこうしている内に反対側から別の冒険者が開け始めた様で扉が動き始めた。二人共手を離す。

「わーい自動だー」

「……………」

人が通れる幅に開いた途端に、扉の反対側にいたエルフの女盗賊が素早く通ろうとする。しかし、リリアも同時に通ろうとした為、二人して開いた扉の隙間でぶつかる。

「あーすいません」

「こちらこそ…」

再び同時に動く二人。

「あーすいません…」

「いや……」

さらに……。

数回同じ事を繰り返した所でミューがリリアの首根っこを掴み扉からどかすと、女盗賊に謝る。

「本当に……すみません……」

「ああ……こちらこそすまない……」

女盗賊も気恥ずかしかったのか、振り返りもせず迷宮の奥へ走っていった。

「リ……リ……ア……」

「え！私が悪いんですかー！」

もういいやと無言で進むミューを後から追いつけるリリア。

何か成長してるんだかしてないんだか分からないリリアに、やきもきした心はとつくになくなりミューは可笑しくなって走り始めた。

「ちょっと！ミューさん早いー置いてかないでー。何で笑ってるんですかー」

街に帰り、見付けたアイテムを鑑定してもらい、さらに不要な物は引き取ってもらう。

「なんだかガラクタばかりね……」

「まあ盗品とかだから仕方ないんじゃないですかー。あ、ミューさんまた大量に地図売ってる」

「いいでしょ鑑定費用取られないんだから、いい小銭稼ぎになるのよ！」

嬢ちゃん解ってるねと、酒臭い息で買い取り作業を進める店主。酒を飲みながら店をやっているのに鑑定眼が落ちないのが不思議である。

「後は…武器を修理に出してつと…リリアはどうする？」

「私は露店見てきますー」

「じゃあ後で噴水広場に集合ね」

「あいあいー」

今回の探索で完全にひびが入った槍の修理は普段に比べたら高額だったものの、今日の探索で稼いだお金からすれば充分お釣りの出る金額だった為、ほっと胸を撫で下ろすミュー。

「お嬢さんはいつも小まめに修理に持ってくるのに、珍しく無理したね。強い魔物に襲われたのかい？」

「それもありますけど…。友人が急に成長した気がして焦ってしまっ

つい本音が出てしまう。優しそうなドワーフの鍛冶職人の真っ直ぐな目に思わず口から出てしまった様だ。

「でも無事に帰ってこれたんならいいじゃないか。何があってもま

ず帰ってくる。反省したら気持ちを切り替えて探索に出る。引き摺

「はい…ありがとうございます」

「何だか説教臭かったね…、すまんすまん。っと出来たよ」

まるで新品の様になって帰ってきた愛槍を受け取りながら、ミューは思う。

そう、何であれ帰ってくる。今回はもう少し…もう少しという疾る気持ちが無理をさせてしまった。そこにきつとりリアに追いて行かれそうかもしれないという気持ちもあったはず。慢心・焦り。慣れない場所でそれは命取りになる。今回は助かったが次はないかもしれない。武器は傷つけるだけでなく守る為にも使えるのだから。一人で駄目なら二人で。本当はもつといた方がいいかもしれないけれど、まず二人守れる様になるう。そう槍に誓うのであった。

少し気を引き締めて噴水広場で向かったミューが見たのは、とんがり帽子を被り、嬉しそうに光る南瓜の棒を持って花火に火をつけようとしているリリアだった。

「ちょっと！リリア何それ！？」

「え？種と交換して貰った箱から出てきましたー。ミューさんの分これね」

そういつてとんがり帽子と、光るカボチャ棒、さらにカボチャ型の花火と手持ち花火まで渡される。横にいる老婆と同じデザインの帽子の様だ。そしてカボチャ型の箱らしきものが辺りに落ちている。無言で箱を片付けた後に、ミューも帽子を被る。これは流石に兜を

脱がないといけないタイプの様だ。

「似合いますよー」

「そうかな…？」

少し照れながら立つミューを引つ張ると、リリアは大声で叫んだ。

「今から花火大会やりますよー！余ってる花火を持ってる人は噴水まで集まれー！！」

「え！？花火大会？」

「だってお祭ですよ。はい会場はこっちですよー」

「ま…いっかお祭だもんね。会場はこっちですよー！！みんなで咲かそう南瓜の華ー！！」

「ノリノリですねミューさん」

そうこうする内に集まる冒険者。

「おお会場はここか」

「差し入れをあげよう」

余ったカボチャ花火をくれる人もいる。数名集まった所で早速花火に火をつける。街中で火を使うのもどうかと思いつつも、水がそばにあるから困ったら漬けてしまえばいいやという判断である。

「おおー」

「フアイヤー！」

カボチャの形をした土台から色とりどりの火花が上がり、蝙蝠の形の影まで現れる。非常に凝った作りで周りの冒険者達の目も楽しませる。さらに手持ちの花火を付けると噴水の中をリリアが飛び跳ね

始めた。

「火を点ける」

「花火大会だあ」

ミューも一緒になって噴水の中でグルグルと飛び跳ねながら手持ちの花火の火を点ける。パチパチと燃える花火はこちらも非常に彩りが綺麗である。

参加者達も次々に花火に火を点け、噴水の真ん中の土台や、さらには水の中にまで設置する。魔法もかかっているのか水の中でも綺麗に火が上がる。

「わーいわーい花火」

「寺院に火を点ける」

「ふぁいやー！ー！！！」

物騒な事を言っている者もいるようだが実際にやりはしないだろうと高をくくっていたら…。

ドカーーン！！！！

「誰だー魔法まで使ったのは」

「熱いぞー！脱げ」

「そうだ脱げー！！！」

火炎の魔法が噴水の中で飛び跳ねていた者達にかかりそうになり慌てて服を脱ぐ参加者達。

「裸祭だ」

「いえーい！！！」

流石にこれは衛兵が駆けて来るだろうと内心冷や冷やしていたミューだったが、衛兵は寺院の方向へ走り込んで行った。犯罪者だゝ捕まえるーと声が聞こえる。どうやらそちらに忙しく、こっちの騒ぎは放置の様だ。ほっと胸を撫で下ろすミューの横で、ボーグルの小さな魔法使いが再び火炎の魔法を盛大に放つ。

「ふぁいやーー燃え上がれ〜」
「うわああああ」

何故か服を脱いだ男性の戦士が急に毒になったと思うと噴水に突っ伏す。噴水の水の中に寝転ぶ者まで現れた。

「人工呼吸しろー」
「危ないぞー」

無茶である…。

ようやく花火も全て消費し、寺院の方では犯罪者がひっ捕えられ衛兵に連れて行かれた。
参加者も方々に帰って行く。

「いやぁ遊びました〜」
「だねー」

さてそろそろ服を着ようと、荷物を漁る二人。驚愕の表情で固まるリリア。

「ない…」

「え？何が？」

「私のぱんつがない」

「え？え？」

「私のぱんつがないいいいい！！！！」

「え！？ちよつとリリア？」

慌てて荷物をひっくり返すリリア。

「嘘！祝福されたレギンスだったのに！！」

「え！嘘！本当じゃないの！？」

ざわつく噴水広場。囁きの様に、ぱんつ泥棒か…？ついにこの地域にまで現れたか…、さつき犯罪者が連れて行かれたがまさか…等の声が聞こえてくる。

「誰か…ぱんつ知りませんか？」

「ノームの娘のぱんつを誰か見てませんか？」

ぱんつを連呼するうら若き乙女が二人。聞いている周りのざわつきも大きくなる。

「いい加減恥ずかしいし、ちよつとリリアもう一回荷物見てみなよ」

「はい……。あ…ぱんつあった！奥に入ってた」

「もう…あんなたつて娘は！！すいませんお騒がせしました」
「！！！！！！本当にすいません！！！！」

頭を下げ続けるミュー。笑って返す周囲の人々。

何だかんだいって今日もこの街は平和である。

こんな事をしていても笑って許すそんな雰囲気もある。結局みんなこの街が、この場所が好きなのだろう。

これからこの二人も含めて冒険者は沢山現れて去っていくだろう。でも、きつとこの過ごした時間は忘れずに心の中に残るだろう。人と人が触れ合った記憶は早々風化するものではないのだ。

この街に関わる全ての人に幸多からん事を。

（後書き）

この花火大会は最後大混乱でした。

ちなみに作中で裸と書いていますが、実際は肌着の様な物を着ているので真っ裸ではありません。そこまでエロスはありません。

まるで終わりの様な書き方をしましたが、当分書きます。書かせて下さい。ネタはリアルリアさんが大量に出してくれます。ここでも感謝の言葉を述べたいと思います。ありがとうりリアさん！読んで吹き出すとイイヨ！

このゲームも関わった人もなんかみなさん大好きです。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3676y/>

冒険者かく語りき3 カボチャ精霊と花火大会（短編ver）

2011年11月15日07時14分発行